



第21号  
2013年2月8日  
尾張旭市立東中学校  
この通信は、3年生のみならずと保護者の方々に向け、編集・発行しています。  
<http://www.owariasahi.jp/higashi-j>  
編集：深谷男子

卒業に向けて、ついに卒業の準備がはじまっています。

私立一般入試が終わりました。この結果の通知が家に届く頃です。結果を真摯に受け止めて、これからの中学校生活や公立の受検に向けて、今一度、「何をすべきか」「何ができるか」をよく考えて行動しましょう。

「なでしこ流を解く」

(中日新聞より)

「ひたむき」

「準備」

「仲間を大事に」

「明るさ」

「礼儀正しさ」

「芯が強い」

学年通信NO19・20に続き、第3弾

「礼儀正しさ」

「強さを支えた道徳心」

世界の審判が「日本人はマナーを守り、チームに道徳観がある。」と感心する。佐々木監督も「日本には道徳心とい



うベースがある。礼儀正しい、フェアプレーというのになでしこ流の一つ」と語った。

ロンドン五輪の準決勝のフランス戦でのこと。主将の宮間あや選手は、五輪初の決勝戦に進んだ喜びを表すよりも先に、負けて悔しい思いで座り込んだフランス選手に手をさしのべた。礼儀正しく、相手を敬う姿勢がさすがしかった。

「相手の立場を考える能力に優れている。最近のスポーツは勝てばいいんだとか、どんな結果を残したかということしか頭にない。私が日本の武道の歴史を学んで思うのは、相手がいるから相手に勝つことができる。相手がいるから『ありがとう』と感謝できる。」(関西

大学国際部准教授アレキサンダー・ベネット氏)

「芯が強い」

澤穂希選手や安藤梢選手は海外を経験している。佐々木監督は「海外組は要所で体を張り、たくさん走る。タフさが身につく。」と語る。

海外を経験した安藤は、「こちらでは外国人。結果を求められる。ボールを受け損なった見方に『今のはあなたへのパス。何で取らないの』と責められる。言い返さないと監督も周囲も私が悪いという感じになる。隠れて涙したこともあったが、ゴールで見返し、徐々に信頼を勝ち取った。」と言っている。逆境こそ発揮される「芯の強さ」。「辛さに耐えられるのは、目的がはっきりしている」からだそうだ。

1979年にパリで日本人初のミシュランの一つ星シェフとなった中村勝広氏は「国内だけでやっていても井の中の蛙。本物のフランス料理を学びたい。」と片道切符だけ持ってフランスに渡った。「一生懸命さを武器にするしかなかった。」と朝一番に出勤し、一日ひたすら15時間働いた。「結果が得られなくとも、どういうふうな試練に立ち向かい、乗り越える意志を示したか。それが後の自分を支える精神的なシンボルにもなる。」

海外修行で問われるのは、成果も必要だが、芯の強さ。

「礼儀正しさ」「芯の強さ」は一朝一夕にはできません。日頃からの「当たり前前」のことが当たり前前にできる「力」が必要です。



